

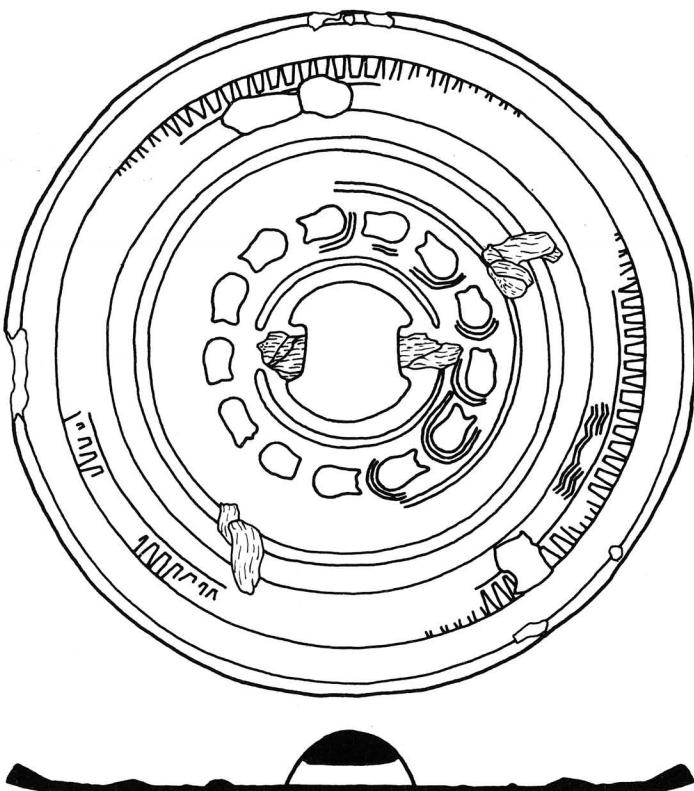
### 3. 裏町古墳出土の銅鏡について

裏町古墳は仙台市西多賀一丁目にあった西に前方部を向けた2段築成の前方後円墳で、家屋新築に伴い1972年と1973年の2次にわたり仙台市教育委員会が発掘調査を行った。<sup>1)</sup> 前方部端と後円部南側が破壊されていたため正確な規模は不明であるが、主軸長は50—60m程となると考えられる。後円部頂より河原石積豎穴式石室が検出され、石室内より鏡・刀子・細根式片刃鉄鎌が各1点発見されている。主体部付近の盗掘坑とその周辺より須恵器が発見され、墳丘全域から円筒埴輪・朝顔形埴輪が大量に出土している。須恵器には器台・樽型甕・台付壺があり陶邑編年TK208型式の頃のものと考えられ、埴輪には2次調整B種ヨコハケを持つものと2次調整を省略したものがある。<sup>2)</sup>

この裏町古墳から出土した鏡は、1985年に角田市教育委員会が発掘調査を行った角田市横倉古墳群の吉ノ内1号墳出土の鏡とともに、宮城県内で発掘調査によって出土した鏡としては数少ない例である。この裏町古墳出土鏡は報告書では珠文鏡とされ、以後この認識が踏襲されていた。筆者はこの裏町古墳をはじめとする郡山低地とその周辺から出土した埴輪の検討を行った際に、小林三郎氏がこの鏡を倣製獸帶鏡C型と分類されていることを紹介するとともに若干の検討を行い、小林氏の分類ではその指摘通り倣製獸帶鏡C型であり、一般には乳文鏡と呼ばれるものであることを指摘した。<sup>4)</sup>

現在、仙台市教育委員会では東北歴史資料館に依頼して遺物保存処理事業を継続して行っているが、今年度の同事業の一環として、この裏町古墳出土鏡の保存処理を依頼した。その際にこの鏡を再度検討することができ、また東北歴史資料館と同村山斌夫氏のご好意により、X線写真の撮影を行っていただいた。これらの検討の結果、いくつかの補足・訂正を行うべき点があるため、ここに新たに作成した図版とともに報告する次第である。

裏町古墳出土鏡は面径9.1cmで、一部欠損が見られる以外は完形である。銅質は粗質で鋳出しも悪く、文様が判然としない部分が多い。円座を配す円形鉢のまわりに、2本の爪形の足を付けたような乳状の半肉刻の突起とその周囲に横に長いC字状の細線をめぐらした文様を13個右まわりに配している。<sup>5)</sup> その外側には、やや間を置いて隆帶状の太い圈線がめぐるが、これらの部分には文様があったかどうかは残存状態が悪く不明である。太い圈線の外側は、複線波文帶—鋸齒文帶がめぐる。このような文様は、小林三郎氏の文類に従えば、獸帶文鏡C型にあたる。<sup>6)</sup> 但し小林氏は四乳九獸を表すとしているが、13個の文様全てに上述の特徴が認められ、小林氏の分類に従えば乳をもたない13獸とするべきであろう。これは一般的には乳文鏡と呼ばれるものにあたる。<sup>7)</sup> 鏡背には部分的に朱が付着している他、鉢と鏡背の2ヶ所に紐が錆着し残存している。紐は縄文原体の表現で表せば1段Rのよりである。



第1図 裏町古墳出土鏡実測図(実大)



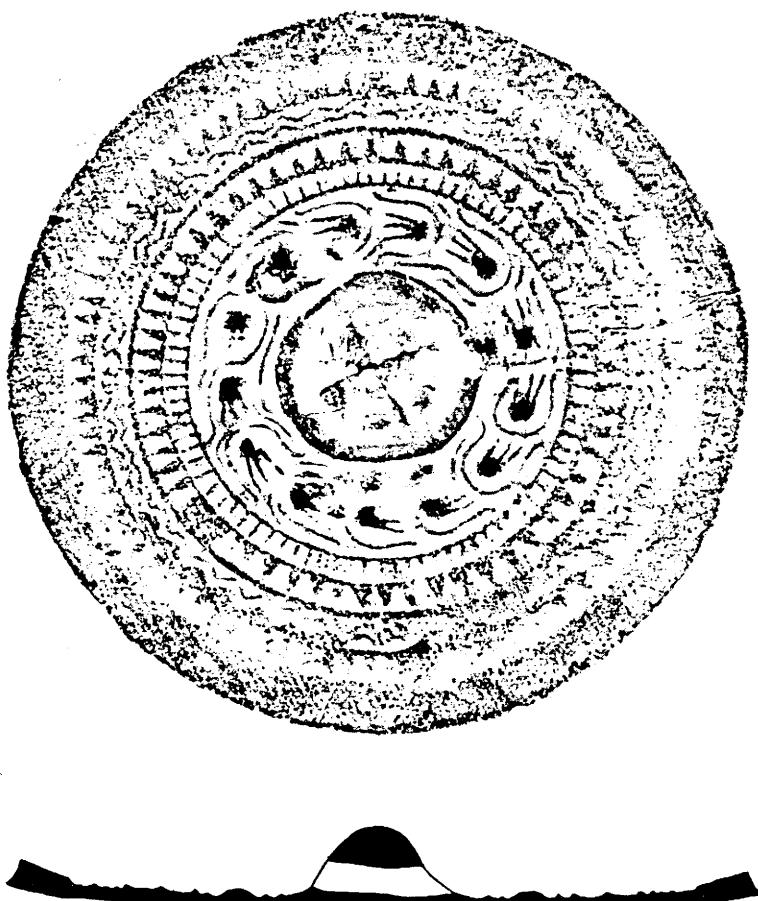
写真1 裏町古墳出土鏡全体写真



写真2 裏町古墳出土鏡X線写真



写真3 裏町古墳出土鏡細部写真



第2図 伝鳥取県東伯郡東郷町一の宮出土鏡  
（『山陰の前期古墳文化の研究Ⅰ』より・ほぼ実大）

鏡背側の複線波文帯から鋸歯文帯の部分にかけて、2ヶ所に不整形で偏平な突起が見られる。これらは張り付けたような状況を呈しており、型くずれによるものとは考えられない。また細長くて大きい方の突起のちょうど裏側の鏡面には、亀裂が部分的に観察される。X線写真で見ると、この細長い突起に沿う形で亀裂が走っていることが判る。もう一方の突起の部分に亀裂があるかどうかはX線写真でも判然としないが、表面の状態が類似することより、この2ヶ所

の突起は、亀裂などを補修した鉄掛であると考えられる。但し、鏡本体と補修部分の銅質は、肉眼観察では特に違いは見いだせない。日本の原始・古代の鉄銅製品における鉄掛は、銅鐸や銅劍にいくつかの例が見られる他、<sup>8)</sup> 大阪府紫金山古墳出土の仿製三角縁三神三獸獸帶鏡に鉄掛<sup>9)</sup> が施されていると指摘されている。

裏町古墳出土鏡と同様の文様表現で13獸を表すものとしては、佐賀県唐津市杉殿古墳出土鏡<sup>10)</sup> と鳥取県東伯郡東郷町一の宮出土と伝えられるものがある（第2図）。杉殿古墳出土鏡は面径11.1cmで獸形の配列が左まわりであるのに対して、伝一の宮出土鏡は面径9.9cmで獸形の配列が右まわりであり、伝一の宮出土鏡の方が、裏町古墳出土鏡に良く類似する。伝一の宮出土鏡は、3本の爪形の足を付けた乳様の突起のまわりに横に長いC字状の細線をめぐらし、さらによつてにはもう一重細線をめぐらしたもののが13個右まわりに配されている。その外側は2重の鋸歯文帯—波文帯—鋸歯文帯となっている。裏町古墳出土鏡を、この伝一の宮出土鏡のより退化

したものと見るべきであろう。中期古墳の北限に近い裏町古墳出土鏡の類例が西日本に見られることは興味深いことであり、鑄掛の問題とともに、今後もさらに類例の発見に努めていきたい。

文末ではあるが、X線写真の撮影とその利用にあたって便宜を計っていた東北歴史資料館と同館の村山斌夫氏に感謝します。

(藤澤 敦)

### [註]

- 1) 伊東信雄・伊藤玄三・岩渕康治(1974)『裏町古墳発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第7集
- 2) 藤澤敦(1987)「第Ⅲ章考察」『大野田古墳群春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第108集 PP. 54-90
- 3) 藤沼邦彦(1987)「4宮城」『日本考古学年報38(1985年度版)』PP.73-78
- 4) 註2文献に同じ。
- 5) 註2文献では、一部の文様が3本の足を付けたような形とも考えられるものがあることを重視して3本としたが、今回詳細に検討した結果、全て2本と考えられる。ここで訂正しておきたい。
- 6) 小林三郎(1983)「古墳時代倣製鏡の鏡式について」『明治大学人文科学研究所紀要』第21冊 PP.1-79
- 7) 樋口隆康(1979)『古鏡』新潮社
- 8) 小林行雄(1959)「いかけ 鑄掛」『図解考古学辞典』創元社 P.37、近藤喬一(1970)「平形銅劍と銅鐸の関係について」『古代学』第十七卷第三号 PP.143-155
- 9) 近藤喬一(1973)「三角縁神獸鏡の仿製について」『考古学雑誌』第59卷第2号 PP.1-28
- 10) 松岡史(1962)「第二編第四章古墳時代」『唐津市史』、志伝憲彦(1977)「付 佐賀県下出土の古鏡—弥生・古墳時代—」『杵島山遺跡調査報告書』佐賀県立博物館研究書第3集
- 11) 山陰考古学研究所(1978)『山陰の前期古墳文化の研究Ⅰ』